

令和２年度 第１回帯広市総合教育会議

1. 令和３年３月２９日月曜日 １４時 ～ １５時
総合教育会議を帯広市役所１０階 第６会議室に招集する。

2. 本日の出席者

帯広市長	米 沢 則 寿
教 育 長	池 原 佳 一
教 育 委 員	田 中 厚 一
教 育 委 員	佐々木 しゅり
教 育 委 員	柳 川 久

3. 本日の議事日程

（１）協議事項

子どもたちの学びのあり方について

4. その他

1. 開会

米沢市長)

- ・新型コロナウイルス感染症の拡大により、学校の授業や行事のほか、子どもたちの日常生活も大きく様変わりした。4月からはGIGAスクール構想に基づくタブレット端末の1人1台利用が始まり、子どもたちの学びの可能性がさらに広がる。将来の予測が困難な時代において、子どもたちには正解のない問いに自発的に向き合っていける姿勢や多様な人々と協働する力が求められている。
- ・本日の会議ではこうした環境の変化も踏まえ、子どもたちの学びのあり方について、委員の皆様には幅広く忌憚のない意見をいただきたい。

池原教育長)

- ・教育委員会では、この1年感染症対策と学びの保障の両立をいかに図るか、日々悩みながら取り組みを進めてきた。まさに今、困難な時代だからこそ子どもたちがどんな時も未来に向かって、生き抜くことができる力を育てることが重要。
- ・生涯にわたって誰もが自分の個性や能力を発揮できて、社会で活躍できる環境づくりにつながる取り組みを進めていきたい。本日の会議では市長を交えて、各委員の皆様には様々な立場から意見交換を行いたい。

2. 協議事項

○子どもたちの学びのあり方について

事務局)

(資料の説明)

米沢市長)

- ・本日の意見交換では、感染症の学校教育への影響という点、子どもたちに必要な学びは何かという点、ポストコロナの可能性について、この3つの視点がポイントになると思う。こうした点を意識して率直なご意見をいただきたい。

佐々木委員)

- ・小学生の子を持つ保護者目線から考えた。昨年2月の一斉休校で子どもたちも外出できない状況になった。友達や先生と話すこともできず早い段階からストレスを溜め始め、家族以外の他者とコミュニケーションを取れないことが、子どもの心身ともに影響を及ぼすことに驚いた。親目線では学習の遅れも心配だ

が、生活リズムの確保も難しかった。勉強をさせても先生に質問できず、親は先生の代わりにはなれないと痛感。一斉休校でほとんどの保護者の方が感じた不便さは、不登校や障害など、様々な理由から学校へ通えない子どもたちの家庭の皆さんが従来から感じていた不便さや孤立感だと思った。

- ・一斉休校での不便さをカバーし、学びを止めない効果的な代替手段を講じることは、異常な事態に対応するだけではなく、多様な子どもたち、様々な境遇にいる子どもたちを誰一人取り残すことなく、学びを提供することにつながる。今後の変化に富む時代に、子どもたちがたくましく生き抜くための大きな可能性を秘めた教育形態であるGIGAスクール構想が大きく前進したことは、コロナ禍の中で数少ない良かったことである。

米沢市長)

- ・生活リズムの話や親は先生にはなれないという話は、本当にそうだと思う。また、「多様な子どもたち」という言葉があった。「こう教えよう」と教育にも決まった形があるけれど、子どもたちも全員多様だということ。多様性が叫ばれている時代に、子どもたちを大人の多様性と同じように見てしまっていたが、実はそれ以上に広義に解釈すべきなのではないかと感じさせられた。
- ・子どもたちは大人が対応しきれなかった部分や、大人がストレスを溜めていく様子など、特に大人の振舞いを見ていたと思う。突然のことで、子どもも大人も対応しきれなかった1年だったと思う。GIGAスクール構想も多面性があり、大きな変化の中で短期間での導入により、今まで考えてもみなかったことを考えられるようになった面は、良かったことの1つである。

柳川委員)

- ・私は帯広畜産大学の教員で、下の息子は今年から高校1年生になった。小中学生の話が中心だと思うが、大学の経験と共通する部分があると思う。大学生でも高校生でもオンライン関係には慣れていて、一番慣れていないのは私たち大人。オンラインに抵抗感があった教員も否応なく対応する必要に迫られ、慣れてきて随分楽にこなせるようにもなった。一方で、先日図書館で小学生に90分ほど久々に話をしたら、このライブ感覚も捨ててはいけないと思った。どういう質問が来るかわからない状況下で、質問に対する答えを瞬時に判断することも教員には求められていることを忘れてはいけない。
- ・オンライン、オンデマンド、ライブ授業、必要に応じてそれぞれの組み合わせが重要。オンライン、オンデマンド授業の利点はあるが、支援が必要ななどの理由で授業に出たくない学生は成績が伸びる。地方大学でも都市と同じ教育を提供できる反面、通信講座と変わらなくなることが一番の危惧で、地方の大学の

個性をどう出していくかが課題。

- ・子どもには心の教育も必要だが、成績面で言うとオンライン授業は成績の良い子には影響がなかった。成績の二極化が進む傾向で、大学生でも小中学生でも教員のフォローが必要。成績で表せない心の部分を、コロナ禍やGIGAスクール構想の中で、上手くやっていくのが難しいと感じる。大学生くらいになると、人間性が出来上がってはいるが、小中学校では端末の機能を使ってより細かく子どもたちを見ることができるとか疑問。大学とは比較にならないと思うが、根っこは繋がっていて、義務教育からさらにその先へと歳を重ねているので、そこをどう受け止めて伸ばすかというところを考えなければならない。

米沢市長)

- ・冒頭の「否応なく」ということは、やらざるを得なくなり追い込まれてやる場合で、やってみたらできたという話はそのとおりだと思う。ライブ感覚はまさに今欲しいもので、現場で起きる新しい発見、気づきや空気感などは、Webではなかなか感じづらい。これからいろいろなツールが開発されるだろうが、現段階ではギャップが大きく、困ることがある。
- ・大学の個性についてのお話は、私も行政をやっていて、地方の個性、大学やデジタルの世界で、どうやって創っていくのが課題と思っている。地方と都市の差がなくなったら地方が優位かといえそうでもなくて、地方は自然があるという言い方がこれからは通用しなくなり、地方の教育とは何かという次元に入ろうとしている。地方の優位性は創っていかなければならないと感じている。
- ・成績の二極化については強く共感した。ポストコロナで一番怖いのは格差で、今後は能力格差が強烈に表に出ると思う。そのベースになるのが教育ではないか。柳川委員がおっしゃったように、私が子どもの頃は、理解が追いついていない子たちを引き上げる先生がいた。自分も、置いてきぼりにならないよう、引き上げてもらえたおかげで、何とかついて行けた経験がある。今のこのような事態になると、そこまで見てもらえるだろうかと感じる。今は経済の格差が教育の格差になり、将来の生活の格差になると主張する人もいるが、教育のやり方がライブではなくなると、この引き上げができなくなるのではないかとお話を聞いて感じた。ICTの活用はICT自体が悪いわけではなく、活用しきれない教育環境、あるいは職場環境がこれからリスクになってくると思う。

田中委員)

- ・人生60年間も生きて、コロナ禍のようなことは生まれて初めての体験。この1年を通じて、柳川委員もおっしゃっていたが、我々が思う以上に学生、若者の方がしっかりしていた。市長もおっしゃっていた「大人は子どもに見られてい

る」というのは、まさにそのとおりで、遠隔で右往左往している先生を見て、一生懸命なのか適当なのかという評価も適切になされている。大人が苦勞していることも、正当に評価されていると感じた。

- ・コロナ禍のメリットとデメリットを考えても良い時期と思う。コロナの教育におけるメリットは、世の中には無意識のうちに人を傷つけることがある。つまり自分が人と関わることで、感染させるかもしれないと考えさせられたこと。自分の言葉が相手を傷つけるかどうか分からない。我々も含め、子どもたちは稀有な体験をしているので、教育にとっていいチャンスだと捉えてみてはと思う。デメリットは、今まで我々がプラスだと捉えていたことが全部ひっくり返ってしまったこと。コミュニケーションにしても、ソーシャルディスタンスを保つことや、会ってみて初めて触れ合えたというようなことが失われた。小中学校の子どもたちにこれが強制されると、ポストコロナでも人間関係やコミュニケーション自体が大きく変わっていくかもしれないし、共同体や地域自体も変わってしまうと感じる。
- ・デジタル化も課題を感じている。アナログからデジタルへの変化は、子どもや人間の未来像それ自体を大きく変える気がする。我々が思う人間の在り様について、アナログからデジタルになると相当違ってくる気がする。それは悪いとは言えないし、世の中の流れでそうなるべきだと思うが、上手にやらないと大変なことになるかもしれない。
- ・電子書籍と紙媒体の話。帯広市図書館も電子書籍の貸し出しが始まり、帯広畜産大学の図書館でも電子書籍が多くなっているというお話があった。それ自体は悪いことではない。しかし、例えば辞典の厚みで人間の知識量というのはこんなにすごいと感じられる。知識がどういう形で積み上げられていくのか、子ども心に感じられた時代だったが、電子では全く見えない。それが確認できなくなることに對し、若干の心配を感じた。ただ、プラスもあるので、デジタル化は進めていくべきだし、もっといろいろなプラスのものが見えてくる。

米沢市長)

- ・大学生も小中学生も、大人が教えることの他にどんな対応をしていたのかを子どもたちは見ており、従来型の権威みたいなものは意味がなくなる時代になったと思いながら伺っていた。我々は子どもの目を常に意識している上で、学びとは何かを考えないといけない。
- ・メリット、デメリットの話で、都会のすごさは人が多く、多様な人がいて、物や情報も集まっている。都会で何かすることが効率的で合理的。今回、ソーシャルディスタンスも保てず、人が多いほどウイルスには弱い、都会の脆弱性という言葉を作った。議会でも地方はチャンスだと話している。

- ・我々の感性やアナログの世界は目に見えたり、触れられたりするもの。これから始まるデジタルは目に見えない世界になる。まだ準備ができていないのに、アナログ世界の価値観で説明していかなければならない。そのギャップが子どもたちには見透かされると思う。
- ・今回、G I G Aが始まるので急がなければならないと思います、帯広市の予算で小中学校の本の蔵書率を文部科学省の基準を満たす 100%にする。今 100%にしなければG I G Aの世界やデジタル図書の世界がどんどん進み、100%にすること自体が後ろ向きになると感じた。我々が置かれた環境が変わり、人間関係にも影響するので単純な話ではなく、早く前に進んだことによるメリットもあり、早すぎてついていけないことのデメリットもある。今後の世界は変化だけでなく、移動や情報交換のスピードも速くなる。問いを立てる能力とか、感性がちゃんとある子どもにしたいとか、我々は相手の気持ちを慮れるようにと教えられてきたが、学校ではどう教えるのか。人と人との接点があって、泣いたり笑ったりする中で覚えられることが、距離を取るとなったらどうするのか。教育は大変な時代に入ったと思う。

池原教育長)

- ・昨年、数校の小中学校の子どもたちとの意見交換で実際の声聞いた。従来と同じような学校行事ができないため、目的に沿うような形で工夫されていたが、異学年との交流ができないことは、児童生徒にとって大きな影響があると感じた。整備されたW i - F i 環境下の生徒会室で調べものをしてほしいという話があり、子どもたちの考えは今の時代のニーズと同じだと思ったが、多様な子どもたちを取り残さないことが大切だと感じた。端末でできることに偏るのではなく、最後は教員、大人が子どもたちのいろいろな能力、個性・特性をどう引き出していくか。G I G Aスクール構想やI C T環境で、引き上げることはできるかもしれないが、それを使うのは人間。
- ・「つながり」が大切。パソコンを使用することの「つながり」はあるが、遠隔ではない対面授業による「つながり」も、異学年交流などで子どもたちに求められている。G I G Aスクール構想でいろいろなものが解決するように見えるがそうではない。逆にそれが全面に出ることで、必要なことまでを省略していくのではないかと危惧している。活用するのは教員なので、各校長にはG I G Aスクール構想を意識し過ぎて、子どもたちの心の動きを見過ごさないようにと伝えた。先ほど市長からもお話があった教育環境、職場環境が非常に大事になる。子どもが取り残されてはいけないが、教職員も取り残されると本末転倒。教職員も同じ方向を向いて、同じ目的でG I G Aスクール構想を進めていくためには、資質や技術も含めた研修、基盤づくりをしていかないと、子どもたち

に影響が出ると思う。

- ・地方の教育、個性というお話があり、とても難しいことだと思う。帯広市はこういうことを大切にしているということを周りが感じ取れるような見せ方が大事。1つの手法として、「おびひろ市民学」があるが、カリキュラムの1つとして見せるのではなく、裏に隠されている核となる帯広市が大切にしていること、カリキュラムを組んでいる意図が伝わるように周りを見せていくことが大切であって、手法や形が重要ではないと思う。

米沢市長)

- ・G I G Aスクールでも端末でも、所詮はツール。新しいツールが出てくると慣れるまでは振り回されてしまうが、それは仕方がない。子どもたちはあたふたしている大人たちを見ているかもしれないが、努力している姿も見ているはず。上手にできたからすごい大人だと思うわけでもなく、一生懸命その都度やっていけばいいと思う。
- ・教育長の言葉で素敵だと思ったのは、何を大切にすることかということ。この地域では何を大切にすることがこんなについて、それを残すためにこうしているという姿を見せなければいけないと思う。学ぶ場において、いろいろな局面で子どもたちの目に入っていくことが大切で、G I G Aでもデジタルでも関係ないと思う。大切なことはきちんとコミュニケーションができて、何を話すかというものを持っていて、相手がどう考えているかを会話の中で感じ取ること。Z O O Mだと顔まで見えるが、本質は変わっていないと思う。
- ・I C T化やG I G Aスクール構想を進める中で、いろいろな懸念があると思うが、大切なのは逃げないこと。常に子どもを真ん中に置いて、子どものために何が最善か。今は我慢しなければいけないことがあっても、将来の子どもたちのためのことを、常にその時々で考える。コロナは今の当たり前がほとんど否定され、見直しが必要になった。子どもたちに今まであるものをそのままあてがうのではなく、これは大丈夫か、変わっていないか、我々の偏見が入っていないか、先生たちにしっかり見極めていただき、上手くいかない時や間違える時もあると思うが、最後は教育長が言うように、大切にしてきたものまでを蔑ろにして、何かをしていくということではないと思う。
- ・本日の意見を踏まえ、教育委員会、市長部局の連携でしっかりと教育行政を進めたいので、引き続き、委員の皆様のご協力をよろしくお願いする。